

砂を踏みしめる足音で目覚めた。

枕元に置いた腕時計を見た。八時少し過ぎ。いつもより一時間以上も寝坊だ。ここ数日、目を追って目覚める時刻が遅くなっている。シユラフから這い出そうとした瞬間、激しい頭痛が脳天を直撃した。昨夜のウイスキーがまだ血流内に残っている。うめいた。

耳を澄ますと、足音はテントに近づいていた。

けものの足音ではない——人間だ。

山奥で前触れもなく出くわしてもつとも恐ろしい生き物は、マムシでもなく、クマでもない——人間だ。

私が天幕を張っている龍之尾川上流の河原は、最寄りの民家から三キロ以上離れている。こんな時間のこんな場所に現れる人間とは、いったいどんなやつなのか。少なくともまつとうな職に就いたまつとうな価値観の持ち主ではなからう——私と同様に。

そもそも私は人間の痕跡から少しでも離れたくてこの場所を選んだのだ。テントを張った砂地、その前の龍之尾川^{たつのお}。背後の雑木林、対岸の砂岩の崖。それらすべてを私は独占できた。天幕生活をするときにはいつも、ささやかな領地を所有した荘園領主のような気分になれた。

が、今は不審な足音が私の領地を蹂躪している。

無視してもよかった。が、地元の人々の心証を悪くするわけにはいかない。相手が何者であれ、挨拶くらいは交わしておかなければならないだろう。私は一つため息をつき、テントの入り口のファスナーを開けて外に出た。

若い男の痩せた背中が見えた。黒い長袖Tシャツに、灰色のだぶだぶの作業ズボンといういでたちだった。両手を腰に置いて、龍之尾川の対岸の崖を見上げている。

私に気づかないはずはない。が、男はこちらを振り返ろうともせず、風化した砂岩の崖を眺めていた。

「おはようございます」

私は男の背中に言った。

彼は振り返った。「若い男」には違いなかった。が、私が思っていたよりももっと若かった。おそらく、十代の半ば。高校生だろうか。

「ども。おはようございます」

彼は首を前に突き出すようにして答えた。それでも頭を下げたつもりなのだろう。イントネーションは、この地方のものと違っていた。地元の間ではなさそうだった。少年は腰のベルトから何か重そうなものを下げていた。一瞬それが拳銃に見えて、驚いた。が、無論そんなはずはない。工具か何かのようだった。

先に質問したのは少年のほうだった。

「ここで、何をやってるの？」

少年は物怖じすることなくまるで親しい友だちに話しかけるようだった。

「見ての通りだよ。キャンプしてる」

少年はその答えでは納得がいかない様子だった。私を値踏みするように見た。私には彼の言いたいことがわかった。

「今日は休みでも何でもなし。ゴールデン・ウィークまでひと月近くあるし。でも、それはお互い様じゃないか」

少年はにつこりと笑った。まだ幼さが残る笑みだった。まだ中学生かもしれないな、と思った。が、すぐにその笑みは消え去ってしまった。

「ライターをやってるんだ。仁科碌にしなろくって名で『フィールド・スケープ』っていうアウトドア雑誌に書いてる」

が、少年はどちらとも知らないようで、小首を傾げただけだった。

「君の名前を訊いてもいいかな」

ふと少年の両眼は私の顔から離れ、背後の遠い空を見上げるようにさまよった。まるで、自分の体から遠ざかりつつある記憶を引き寄せるかのように、少年の口元にや力が入った。彼は真顔になった。

「俺……二笠旭みかさあさひ。二つの笠に、あさひの旭」

「次も月並みな質問だけど、何年生？」

「高一になったばかり」

「紅茶でも淹れるけど、飲む？」

旭少年はまた首を前に突き出すような仕草をした。

テントのなかからコッヘルを取り出した。それに冷たい龍之尾川の水を満たし、ブタンガス・ストーブで沸かし始めた。湯が沸くまでのあいだに、少年用にアルミカップを、そして自分用には昨夜の飯粒がこびりついたままのシエラカップを引っぱり出

す。シエラカップは洗剤代わりに川原の砂を使い、川の水で洗った。

「君は、ここで何をやってるの？」

私が問うと、少年は龍之尾川の対岸に顔を向けた。まぶしそうにして、砂岩がむき出しになった崖を見上げる。

「化石を探してるんだ」

「化石？ 恐竜とか、マンモスとか、そういうやつ？」

少年の眼に、私の反応を面白がっているような光がよぎった。が、先程の笑みと同様、すぐにそれは消えた。

「『月のおさがり』っていうんだ」

「『月のおさがり』？ 綺麗な名前だね。こんなところに、化石が出るの？」

私はティバッグで紅茶を淹れ、アルミカップに注いで少年に差し出した。砂糖を勧めると、彼は首を振った。私は、自分の紅茶に砂糖とウイスキーをスプーン一杯ずつ加えた。

「この辺みんな、化石の山なんだ。あそこに見える白い小さな塊、全部貝の化石だよ」

少年は、テントの向かいの砂岩の崖を指し示した。眼を凝らして見る。なるほど確かに彼の言うとおり、灰褐色に風化した岩肌のところどころに、数センチ程度の白い塊がいくつも覗いている。

少年は僕にシエラカップを返すと、不意に龍之尾川に向かって駆け出した。彼は、靴やズボンが濡れるのいとわずぎぶぎぶと水のなかに足を踏み入れた。龍之尾川の水は、せいぜい少年の太もも程度の深さしかなかった。

少年は川を渡り切ると、そこで立ち止まり、しばし崖の上を見上げた。

微動だにしない。まるで美術館の巨大で荘厳な絵画に見惚れているかのように。背後からだつたが、私には少年の姿がそう見えた。

視線を追った——崖の上方。

光った。

見間違いかと思った。もう一度眼を凝らす。確かに、太陽光を反射して青白く鈍く光る点があった。

太陽に雲がかかった。あたかも地中に吸い込まれるかのように、青白い光点が消えた。

少年が振り向いた。私が見つめていることに気づいたのだろう。やや気まずそうな笑みを見せた。

彼は崖に向き直ると、岩にとりつき、器用に上り始めた。ちよつとしたロック・クライミングだった。

少年は川面から一メートル弱ほど崖を上ると、両脚と左手で砂岩の壁に体を「三点確保」した。慣れたものだ。右手で拳銃に見える工具をベルトから引き抜いた。ハンマーだった。一体の金属から頭と柄を削り出して作られた、岩右用のハンマーだ。頭の片側はつるはし状に尖っている。少年は岩壁に張り付いたままハンマーを振るい、風化した砂岩を打った。金属音が森にこだました。その音に驚いたのか、テントの背後の林から数羽の青みがかつた鳥——たぶんオオルリだ——が飛び立った。

私がオオルリに気を取られているあいだに、少年はすでに崖から降りて戻ってきた。無言のまま手に持った岩の塊を私に向かって突き出した。

灰褐色の硬い岩のなかに、確かに真つ白い貝殻が三枚埋もれている。いずれも直径は三センチくらい、丸い二枚貝。

「ほんとうだ、貝殻が入ってる。なんていう貝？」

「ルキノマ・アキュティリネアトウム」

少年は見事に言つてのけた。

「え？ アキュ……？」

言いかけて、諦めた。私の舌には無理な芸当だ。

「そうか、ここは昔、海の底だったのか」

「この貝が生きていた頃、今よりも暖かい気候で、ここは浅い海だったんだ。岸に近い、波打ち際。それからしばらくすると、陸地から淡水が流れ込んでくるようになった。汽水域になったんだ。わかる？ 汽水つて。海水と淡水の混じった水」

私は「参りました」というふうに頭を下げた。

「どのくらい昔の貝なの？ 恐竜がいる頃？」

少年は「しょうがないなあ」というように首を振った。

「第三紀中新世後期。だいたい……恐竜が絶滅してからとつとつに五千万年くらい過ぎてる。だから今から約千五、六百万年前」

少年は「わかったかな」というふうに私の眼をのぞき込んだ。私は思わず、

「わかりました」

と丁寧に答えてしまった。

「この辺りの化石はみな調べたの？」

「調べられなかった」

少年の声が沈んだ。そのことに強い悔しさを感じているようだった。

「もつと上流のほうから調べ始めたんだ。地層の下のほうから」

「地層の下のほう？　というところ……もつと昔つてことだよね」

少年は少し誇らしげにうなずいた。

「この辺の地層の走向はN一〇度E、傾斜はだいたい二五度東落ちなんだ」

またもや、私には真似も理解もできない複雑怪奇な言葉が発せられた。

「つまり、この辺りの地層は水平じゃなくて、東に傾斜してるんだ。龍之尾川の上流のほうに行けば行くほど、つまり西のほうに行けば行くほど地層の下の部分が出てくることになるでしょ」

少し考えてみても、よくわからなかった。少年の言葉を信じることにした。

「今度こそ、絶対に見つけてやるんだ」

少年はいてもたつてもいられない、という様子で早口に言うと、すぐにも龍之尾川上流へ向かって歩き始めた。

「朝飯でも食っていかないか？」

私は彼の背中に言ったが、彼は「いいよ、そんなの」とこちらを振り向かずに応えた。ハンマーをひらひらと振り回して見せて、少年は川原の大岩を乗り越えて向こうに姿を消した。

5

朝昼兼用の飯は、昨夜作った千切り大根の味噌汁に、昨夜炊いたご飯をぶち込んだおじやだった——ひじょうにシンプルだがまずくはない。少なくとも私にとって。

買い込んだ食料が、底を尽きかけていた。

「もう、帰るかな」

口に出して言ってみる。天幕のなかの独り言は、思いの外大きく自分の耳に聞こえた。

私のフォト・エッセイ「くしゃみしてもひとり」というタイトル——漂泊の自由律俳人、尾崎放哉のもじりだ——は「フィールド・スケープ」誌に連載されている。今回私が選んだのは、学生時代からの私のいちばんのフィールドである、この龍之尾川の畔だった。

「フィールド・スケープ」誌に原稿を寄せているほかのライターはそれぞれ自分の得意分野を持っていた。地元の人たちとの交流、釣った獲物を使ったアウトドア料理、フィールドで出会った野鳥の観察——。それぞれが自らのやり方で自然と触れ、

戯れ、関係する。彼らはそれぞれ、固定読者の人気を得ていた。

が、私は得意分野だと胸を張り、不特定多数の読者の前にさらすべき何もものも持ち合わせていない。ただ自分の身を森の奥深くに置き、その土を踏みしめ、その空気を呼吸し、その水を口を含み、日の光と夜の闇を共有する。ただそれだけだった。短い期間とはいえ、その場で「生きる」ことを感傷的な修飾語や比喩の少ない文章と写真で綴るだけだ。けれども面白味には、欠ける。

しかし、いつの頃からか、そんな地味な文章さえもが書けなくなった。写真もまた、映し出すべき被写体を見失っていた。

理由はわからない。ほかのアウトドア雑誌でも、いくつか小さな連載を書かせてもらっているが、そのいずれもが、私の満足のいくものではなくなっていた。

匂いが、しない。

朝まだきの靄の匂いがしない。古びたテントの合成樹脂と砂ぼこりの入り混じった匂いがしない。深い森の腐葉土の匂いがしない。コッヘルのみそ汁の匂いがしない。飯盒の飯の匂いがしない。焚き火で枯れ枝が焦げる匂いがしない。行間からは、生理的な五感に訴えかけてくる何ものも感じられない。

私が野外生活の悦びを知るきっかけとなった土地へ来れば、あの頃の勘を取り戻せるかもしれない。そんな目論見を密かに胸に抱き、この龍之尾川に天幕を張ることにしたのだった。

それから、五日がたつ。

原稿は、まったく書いていなかった。使い馴れた三千円でおつりがくる万年筆を指先でもてあそぶだけで、原稿用紙は白いままだった。十本のフィルムとともに持ち込んだニコンの一眼レフ——編集長からはデジタル一眼にしろと言われていた——も、一度たりともシャッターを切ることなくバックパックに突っ込まれている。

この辺りを潮時に、街に帰るべきか。

まだ踏ん切りがつかなかった。彼との出会いを、原稿に書けるだろうか。龍之尾川近くに埋もれているかもしれない月のおさがりとかいう化石を、原稿にできるだろうか。

いじましく胸のなかで計算をしていた。が、それは純粋な少年の情熱を利用しようとする打算的な大人の所業にも思えた。

「あと、一日だ」

もう一度テントのなかで独りごちた。とりあえずあと一日暮らせるだけの食料を調

達に行くことにした。

最寄りの食料品店まで、キャンプサイトから五キロ弱の道のりをたつぷり一時間かけて歩いた。道すがら、ハクセキレイとセグロセキレイが龍之尾川の岩に並んでとまっている光景に向かつて五枚ほどカメラのシャッターを切った。

村にただ一軒の食料品店で、味噌とインスタント・ラーメン、魚肉ソーセージを購入し、そのすぐ隣りにある野菜の無人販売所でじゃがいもとキャベツ、まだ青いトマトを買い、料金を硬貨を入れた。

そこから十分ほど歩いて第三セクターのレールバスの駅まで歩いた。駅舎の脇に停められた廃車の軽トラックの荷台でうたた寝をする黒猫をカメラに収めた。駅には唯一の公衆電話があった。テレフォンカードは使えない。古いピンク電話だ。「フィード・スケープ」誌編集部で電話をした。

まだ正午前だったが、板谷編集長は出勤していた。珍しい。

「連絡待ってたのよお、仁科君。締め切りまであと四日でしょ。いつもならもう原稿くれてる時期なのに音沙汰がないじゃない。ケータイにもつながらないし、心配してたのよ。自宅に電話しても誰も出ないし、今どこにいるの?」

板谷美紀編集長は、四十五という年には似合わないつやつぱい声を出した。

つながらないのは当然だ。携帯電話の電源は切って、自宅に置いたままだ。

「まだ、龍之尾川です。あと一日、場合によっては二日、こっちにいるつもりです」「ねえ、仁科君を信用しないわけじゃないけどさあ、ちよつと気になつてたのよ。だって、ここんとこ仁科君の『くしやみ』、ちよつとつつか、かなりパワー不足って感じじゃない? 煮詰まっちゃってんじゃないの?」

さらに板谷編集長は、私が連載している他社のアウトドア雑誌のエッセイやコラムを例に挙げ、いずれも以前の精彩を欠いている、と断じた。

答えを返せなかった。さすがは編集長だ。彼女の眼はごまかせなかったようだ。

「ねえ、どうなの? 今回はいけそうなの? 何か書くべき撮るべき対象は見つかった?」

「見つかった——ような気がします」

「やだなあ、『気がする』ってだけじゃ頼りない」

「だからあと二三日、見守ってみたいんです。絶対に原稿は落としませんから、安心してください」

「要らないわよ」

受話器の向こうの声は急に私を突き放した。

「えっ？」

「無理に締め切りに間に合わせた原稿なんて要らないって言ったの。無理矢理原稿用紙を文字で埋めたシロモノをもらったって、こっちは嬉しくもなんともないの。だつたら、そのページを白紙にしちまったほうがいい。締め切りは……そうね、一週間までならぎりぎり待つてあげられる。だからそのあいだに、わたしに感嘆の声を上げさせるような、ソローが読んでぶつ飛ぶような——つまりね、あなたがほんの一年前まで書いていたようなスルドイ切れ味の原稿と写真、持つてきてちょうだい。いいわね」いきなり電話が切られた。ペンの尻をぴたつと私の胸に突きつける編集長の姿が、受話器の向こうに確かに見えたと思った。

龍之尾川の水は冷たかった。旭少年はよく平気だったな、とその若さを羨みつつ、膝の上まで水に浸かつて龍之尾川を横断した。向かいの砂岩の崖にしがみついた。

なるほど確かに近くで見ると、崖のあちこちに白い貝殻が埋まっている。ほとんどが数センチ程度の大きさだ。実は当たり前のことなのかもしれないが、私には化石の貝殻には模様がなくて少し不思議に思えた。風化は激しく、ちよつと触れただけで白い貝殻はぼろぼろになってしまう。まるでチョークのような粉があとに残るだけだった。

当然私はハンマーなど持っていないので、スイス・アーミーナイフを使って、砂岩の崖をほじくった。岩自体がかなり風化して軟らかく、ナイフの刃だけで削ることができた。

崖にしがみついたままの作業なので、しばらくすると両脚が痺れてきた。が、それでもいくつかの二枚貝の化石を壊さずに取り出すことができた。

不思議な満足を覚えた。

私の手のひらの上にあるのは、ごく小さな貝殻に過ぎない。今にも壊れそうな、脆い海の生き物の死骸に過ぎない。が、そのちつぽけな死骸が、何万年も——旭少年によれば千四、五百万年——もの長いあいだ地中で眠り続けていた。私のような人間、ホモ・サピエンスには想像もつかない時を背負っている。

私の手のひらの上に今、歴史が載っているのだった。

それは、私に今まで感じたことのない充足感を与えていた。繊細な貝殻を壊さないようにそつと片手で包み込み、川を渡つてテントに戻った。生まれてはじめて自らの

手で発掘した化石に向けてカメラのシャッターを切った。

おそらくこの龍之尾川に来てはじめての会心の笑みが、私の顔に浮かんだ。

その日は、もう旭少年に会うことはなかった。午後は読書に費やした。漱石の「夢十夜」を読むのは五度目だ。まだ陽のあるうちに夕飯の支度を始めた。

川原に落ちている枯れ枝や枯れ葉を集め、古新聞を焚付けにして火を起こす。キャンプサイトに焚き火が灯ると、それだけで安らぎを覚えるのだった。私が野外生活——「アウトドア・ライフ」などと横文字を使うのもおこがましい——を始めてもう十数年になるが、それはいつまでたっても変わることはない。

野外に天幕を張って暮らす。人間によって作り出された人工のキャンプ場などではない。飼いや慣らされていない、人間の価値観、理解力の埒外にある自然に囲まれて生活することになる。それは、たとえ短い期間であっても、私に心地よい不安感を覚えさせた。人が踏み入れるべきではない領域に土足で忍び込んでしまったという罪の意識。人以外の生き物たちの住み場所に紛れ込んでしまったという一種の恐怖。

そういった感情こそが、私を森の奥深くにいざなうのだった。緊張を胸に天幕を張り、私の「結界」を築かせてもらう。森を統べる何ものかの許しを得られることを祈りつつ、「数日間——あるいは数週間——ここで生きることを認めてください」と心中で呟きながらテントを立て、タープを張る。

そこに火が灯れば、私の結界は完全なものとなる。あらゆる生き物のなかで火を恐れずに利用できるのは、ホモ・サピエンスだけだ。焚き火は、私のキャンプサイトの明かりと暖を取り料理をするためだけのものではない。人智の及ばない自然から私の身を守る一種の障壁であり、ここに人間の領域があるぞ、と森の生き物たちに知らしむる徴でもあった。

まだ、陽は高い。

龍之尾川の水で飯を炊いた。焚き火の周りを川原の石で囲んで簡単なかまどを作り、その上に飯盒を載せた。今どき、飯盒で飯を炊く人などあまりいない。私の知る限り、野外生活に慣れたアウトドア・ライターで飯盒を使っている者はいなかった。かさばるし、その形状のために洗うのが面倒だ。が、私は小学校の頃に買った飯盒をいまだに愛用していた。私が野外生活に憧れるきっかけとなった頃の気持ちを懐かしむ、つまらないセンチメンタリズムである。

野外に出るとき私は、現地での手間を省くために、米をすでに研いでおき、一合ず

つポリ袋に分けて持参している。こうしておけば飯盒にポリ袋の米を放り込み、水を加えて火にかけるだけですむ。

飯を炊いているあいだにコッヘルで味噌汁を作る。具はフリーズドライの豆腐を戻したものと、同じく乾燥ワカメ。コッヘルはコールマンのボタンガス・ストーブにかけた。昼間、野菜の無人販売所で買ったじゃがいもの皮を剥き、簡単に芽を取ってアルミfoilでくるんだ。それに太い釘を一本突き刺し、飯盒をかけた焚き火のなかに放り込んだ。釘を刺したのは、イモの内部まで火が通りやすくするためだ。

不思議なことに、森のなかに来ると、私は肉を食いたいとは思わなくなってしまうのだ。それがなぜなのかはわからない。ハンティングはもちろんのこと、釣りにも興味のない私は、フィールドで肉や魚を得ることが難しいためでもある。今夜の蛋白源は、魚肉ソーセージだ。

ささやかな夕餉ができるまで、読書に耽ろうと思った。漱石の次は、「猫」の寒月君——寺田寅彦の随筆だ。文庫版の「寺田寅彦随筆集」は、あろうことかバックパツクのなかで原稿用紙に埋もれていた。忘れかけていた「くしゃみしてもひとり」を私に思い出させた。

嘆息し、寒月君をひとまず脇に置き、原稿用紙を膝の上に広げた。万年筆を手に取り、そのままの姿勢でしばし待つ。眼の前を流れ続ける龍之尾川を見つめ、その向こうの砂岩の崖を見やり、その上の雑木林に眼を移す。せせらぎの音と、虫たちの鳴き声に耳を傾ける。

しかしそれでも、言葉は湧いてこなかった。もう一度、嘆息する。無為な時を過ごしているうちに、薄暗くなっていた。文字を書くには明かりが足りない、と自らに言い訳して原稿用紙と万年筆を片づけた。飯盒のふたの下から盛んに泡が吹き出し、食欲をそそる香りが立ち上っていた。

夜半過ぎから風が強くなってきた。テントを覆うフライシートが怪鳥の羽ばたきのような音をさかんに上げていた。寝ぼけまなこをこすりつつシュラフに体を入れたまま起き上がった。

他の人はどうか知らないが、天幕で過ごす夜、もつとも嫌な天候が「強風」だった。雨も、雷も、雪も、雹でさえも、苦痛ではない。しかし、テントを揺るがす強風が吹きすさぶとき、私は冗談抜きで恐怖に近い感情を覚えてしまう。

シュラフに頭までもぐり込んで耳をふさいで眠りたかったが、テントの後ろの椎の

木に固定したタープが吹き飛ばされてしまうかもしれない。「嫌だ嫌だ」と思いながらテントの外に出た。

恐れていたとおり、タープはちぎれんばかりに風に吹かれ、ばたばたと暴れていた。暗いなか星明かりを頼りにタープの紐をほどき、苦勞して折り畳んだ。

空を見上げると、暗灰色の雲の塊が風にちぎられ、かなりの速度で飛ばされていた。天気は悪化するのだろうか。もし雨が降るのなら、テントを覆うフライシートははずすわけにいかない。結局、テントにシートがしつかりと固定されていることを確認するにとどめた。

テントに戻ろうとしたときだった。私はぎよつとして動きを止めた。

何かが、聞こえた。

テントにタープを放り込み、耳をすませた。唾とともに緊張を飲み込んだ。

フライシートのはためき、木々のざわめき、そして龍之尾川のせせらぎ。その隙間から切れ切れに洩れてくる音がある。

それは、どう考えてもすすり泣きにしか聞こえなかった。

もう一度唾を飲み込む。

動物がすすり泣くことなどあり得ない。誰かが——人間が、この近くにいた。

テントからヘッドランプを取り出して点灯した。ランプの丸い光の輪が、雑木林を照らし出した。ゆつくりと光を移動させる。

龍之尾川の対岸を照らそうとヘッドランプの向きを変えたときだった。

私の心臓が肋骨の下で跳ね上がった。

人影が、龍之尾川の真ん中に立ち尽くしていた。白っぽいシャツとズボンが光のなかに浮かび上がっている。人影は私に背を向け、やや頭をうつむかせていた。光の輪のなかで小刻みに震えている丸めた背中。

乾ききった口中をなんとか唾液で湿らせ、私は口を開いた。

「あ……旭君か？」

人影は振り返らなかった。そのまま龍之尾川の対岸へと水を蹴って駆け出した。後を追った。

龍之尾川に足を踏み込んだ。水は、冷たい。体が震える。ヘッドランプの光芒が、夜の森の断片を視界に浮き上がらせた。人影の動きは敏捷だった。もう川を渡りきり、向かいの崖にとりついていていた。

足の下の子がぐらりと揺らいだ。たたらを踏んだ。倒れ込んだ。手からヘッドラン

プが飛び、水中に落ちた。光が消えた。辺りを闇が重く覆った。起き上がる。暗さに眼が慣れない。闇雲に、対岸の砂岩の崖目指して走った。足が水に取られた。川底の石に爪先をしたたかにぶつけた。激痛。またしても転倒した。水しぶき。立ち上がり、呪いの声を上げた。

人影は、すで見えない。

砂岩の崖に達したときには、すでに何の気配もなくなっていた。ただ、風だけが吹き渡り、私の濡れた体を凍えさせた。

「旭君！」

その声がむなしく風に引きちぎられていった。

実は、龍之尾川の上流へはろくに足を踏み入れたことがなかった。この周辺を自分のフィールドにしてもうかなり長いことたつのだが、今私がテントサイトに行っている場所よりも上流は、川の両岸が迫ってきており、河原が狭くなっている。そのために天幕を張ることができない。五百メートルほど進むと、もう完全に河原はなくなり、川の両岸は崖になってしまう。それよりも上流に踏み込もうとするなら、蜘蛛男のように砂岩の崖に貼り付いて移動するか、さもなくば腰まで水に浸かって川のなかを進むしかなかった。

そのどちらの趣味も、残念ながら私にはなかった。

小型のリュックに簡単に作った昼飯と、国土地理院発行の二万五千分の一地形図を突っ込み、ざぶざぶと龍之尾川に入った。

もう少し気温が高ければ、この沢登り——最近「キャニオニング」などと洒落た名で呼ばれているが——も心地よかっただろう。まだ四月の上旬、この地域ではほんの一週間ほど前まで雪が残っていたくらいだ。

今まで注意して見たことはなかったが、龍之尾川の両眼に迫る砂岩の崖には、白い大小の貝殻が顔をのぞかせていた。ほんのわずか、眼の向けたを変えただけで、今まで見えなかった者が見えてくる。私は新たな驚きを覚えた。これまではただの岩壁に過ぎなかったものが、何万年もの時を越えて太古の海底の姿を刻みつけられた貴重な大地の遺産のように思われた。

ときどき足を止めては、砂岩の崖の姿をカメラに収めた。これまでは決して被写体として考えたことすらなかった素材だ。薄汚れ、苔むし、ひび入り、風化し、崩れかけた砂岩の露頭。今の私はそんな光景に「美」を感じていた。人工物が絶対に真似し

得ない自然の重み。

貝化石を採取した。丸い二枚貝、細長い二枚貝、平たい巻き貝……。素っ気ない、無機的な砂岩の崖。そのなかに、確かにかつては生命が息づいていた証拠が埋もれている。私が掘り出さなければ、おそらく今まで埋もれていただけの時間と同じ時間、これからも埋もれ続けていただろう遺骸の数々。

化石と対峙しているあいだは、書かなければならない原稿のことも、現実世界の間関係のことも、濡れたズボンの心地悪さも、寒さも忘れることができた。

さんざん苦勞したあげく、大きさが十センチ近いホタテガイのような形の二枚貝を崖から掘り出すことができたときには、思わず歓声を上げてしまった。

二万五千分の一地形図上でテントサイトから直線距離で六センチほど、つまり一・五キロほど進んだ頃、川の曲がり角付近に動くものを見つけた。

人間だった。

さつと緊張が走った。その後ろ姿だけで、私にはわかった。旭少年だった。

少年は、私には気づいていない。彼はハンマーを片手に崖を見上げていた。ふと思いつたように崖に取り付くと、彼はハンマーで岩肌を数回叩いた。金属音が龍之尾川の水の上を走り抜けていった。

私は迷った。迷いつつ、しばらく彼の背中を見つめていた。昨夜の出来事が厭でも思い出された。自分のほうから声をかけたくなかった。旭少年が私を見つけ、先に声をかけてくることを期待していた。

私はじつと川の中に立ったまま、少年の動きを見つめていた。岩の塊がごろりと転げ、旭少年はそれを片手で受け止めた。彼はハンマーを振るつてその岩の塊を叩き割った。が、そのなかにめばしい化石は入っていなかったようだ。少年は岩を川のなかに投げ捨てる時、さらに上流のほうへ歩き始めた。

少年の姿は川の曲がり角の向こうに見えなくなった。

私は、くると回り右をし、テントサイトのほうへ戻り始めた。それ以上、上流へ向かって進むことができなかった。それは、旭少年の領域を侵犯する行為に思えた。

質素な夕飯のあと、焚き火の明かりで貝化石をためつすがめつしながら、ウィスキーをちびちびとなめた。

ふと思いつ立ち、テントのなかに頭を突っ込んだ。目的のものは、荷物の奥深くに埋もれていた。まるでこれでは「発掘」だな、と苦笑した。

小さなハーモニカ——ブルース・ハープ。

中学二年の時に買って以来、フィールドにはいつも持ち込む相棒のような楽器だった。しかし、今回はバックパックに突っ込んでから、触れてもいかなかった。

唇をあて、吹いてみる。Cのコードが夜の森に響き渡る。続いて、第一オクターブからドレミファソ……と演奏してみる。久しぶりなので、ラの音のベンディングがぎこちなかった。

息を整えた。そして、演奏を始める。

全身を覆う心地よい疲労。そして充足感。

まだ八時過ぎだというのに、睡魔が襲ってくる。河原に寝そべり、夜の空を見上げた。雲が多い。星はほとんど見えなかった。ぼんやりと上弦の月。傘をかぶっている。

焚き火を消すためにコッヘルに川の水をくもくと立ち上がったとき、気配を感じた。半ば予想していたとおり、そこには旭少年がいた。

「もう、店じまい？」

何の屈託も見せず、旭少年は笑顔で言いながら歩み寄ってきた。

「いや、営業時間を延長しよう」

私は旭少年を焚き火のそばに招いた。旭少年は、めざとく私が採った貝化石を見つけた。

「へえ、なかなかいいの、見つけたんだね。ああ、このパティノペクテンはすごいや」

旭少年は、私が採った大きな二枚貝の化石を賞賛した。私は大人げなく得意な気分になり、彼に言った。

「飲めるかい、ウイスキーは」

スキットルを掲げた。少年は少しのあいだ考えている表情を見せたが、首を振った。

「やめとく。祝杯を挙げたい気分じゃないし」

「あまりハッピーというわけではなさそうだ」

「まあね。さつき、音楽が聞こえてたけど、あれって、仁科さん？」

「ああ、そうだよ。中学の頃に始めて、キャリアだけはあつけれど、あの程度の音しか出せない」

私はブルース・ハープを出して見せた。

「中学生でハーモニカ？」

「残念ながら、ね」

ブルース・ハープを買った頃。苦みとかすかな痛みなしには思い出せない。

「僕はね、いじめられっ子だったんだ。心を許せる友だちは、ブルース・ハープ——このハーモニカだけだった、というわけさ」

少年は真剣な眼で私をじつと見つめていた。私は少々気恥ずかしくなった。

「いやいや、ちよつとキザだったなあ」

そのとき少年の口のなかで、言葉が淀んだ。

「あいつだって……」

そう私には聞こえた。

「え？ 何？」

「……同じだなあって思ってた」

「同じというと？」

「いじめられっ子だったっていうこと。そして、人から見たらつままないようなことにしか慰められなかったってこと」

「じゃあ、君も……」

「あ、あの、仁科さんのハーモニカが『つままないこと』って言ってるんじゃないよ。私はうなずいた。

「小学校五年のときだったと思うけど、友だちと二人で放課後の理科室に閉じ込められたことがあるんだ」

「友だちと？」

「うん、たった一人しか友だちって言えるやつがいなかったんだ。そいつ、馬鹿なやつで僕をかばおうとした。それで一緒に理科室に閉じ込められちゃったんだ」

「僕にも同じような経験があるよ。僕の場合、トイレの個室に閉じ込められた。もつとも、そのときには一緒にいてくれる友だちはいなかったけど」

「友だちって言っても、全然頼りにならない奴だよ。心の中では味方していても、実際に助けたわけじゃない。そりゃそうだよ。いじめられっ子をかばったら、自分もいじめのターゲットになっちゃうんだから」

「そうかもしれないけど、友だちのことを悪く言っちゃ駄目だよ。君と一緒に理科室に閉じ込められるなんて、よほど勇気がなきゃできないことじゃないかな？」

「そうかなあ……そうかもしれないね」

少年は真面目な顔で何度もうなずいていた。

「それで、理科室でどうしたの？」

「どんどん周りは暗くなるし、そのうち人の話し声も聞こえなくなってきた、ほんとにぼくたち、心細かった。恥ずかしいけど、今白状するよ。そのとき、二人で泣いたんだ。まあ、それもしかたないよね。なにせ、小五だもの」

「恥ずかしいことはない。哀しいときには、泣くべきなんだよ。精神衛生にいい」私の脳裏に映し出されたのは、先夜の少年の姿だった。川のなかに立ち尽くし、声を殺して泣く少年。

彼は私の思いに気づくことはなく、静かな声で回想を続けた。

「そこであいつが……じゃない、僕が、凶鑑を見つけたんだ」

「凶鑑？」

「化石凶鑑。二人並んで床にしゃがんで、凶鑑を眺めてた。そうすると寂しさを紛らすことができた。いろんな化石が凶鑑に載ってたよ。それまで化石って、とても普通の人には手に入らないような、珍しいものだと思ってたけど、そんなことはなかったんだ。なんだかともわくわくしたな。意外に近くでも見つけることができるんだなあって、二人で並んで凶鑑を覗き込んで話してたんだ」

「じゃあ、月のなんとかっていう化石も、そのときに知ったの？」

「うん。一ページ目に載ってたんだ。すつごく綺麗で、不思議な写真だった。実物を自分の眼で見てみたくなったんだ。すごいね、すごいね、つて二人でいつまでも凶鑑を見ていた。いつか一緒に化石探しに行こうよって、二人で相談してた」

「で、理科室から出られたの？」

「見回りに来た用務員さんに見つけられた。そしたら、逆に二人して怒られたんだ。あれは、今でも納得行かないな」

私は微笑した。しかし、少年の相眸は笑ってはいなかった。

「でもね、僕はそんなことがあったなんて、最近まで忘れてたんだ。あいつはずっと忘れなかったのに」

焚き火のなかで枯れ木が弾けた。オレンジ色の火花が舞い散る。

「中学の卒業式の日我突然、あいつがやって来て、『化石を探しに行きたい』なんて言い出すんだ。あいつとはクラスも違って、ろくに喋ることもなかったのに、いきなりそんなこと言い出すんだよ」

「ずっと忘れられなかったんだね」

「そうだね。僕なんか、すぐに忘れ去ってしまったのに」

「そのときは、化石を見つけれなかったの？」

少年は答えなかった。ただじつと焚き火の炎に眼を向けていた。しかし彼の眼のなかには、炎とは別のものが映っているのだろう、と思った。

旭少年は、はつとしたように私を見返した。そして首をすくめるようにした。「駄目みたいだね。やつぱり、そう簡単に手に入るような化石じゃないんだ。苦労して、苦労して、さんざん山を歩き回った末にやつと巡り会うか、それとも逆に、何も考えないでいたらすぐ眼の前の崖に埋もれているか、どっちかなんだと思う」

揺れる焚き火の炎で照らされた少年の顔は、ひどく大人びて見えた。その少年の表情を見ながら、とても私には昨夜の少年の涙について彼に訊ねることはできないな、と思った。

「もう、終わりにしようかと思ってるんだ」

炎の向こうにある景色をすかし見るような眼で、少年はぽつりと独り言のように言った。

「終わり？」

「いくら探しても、無駄なものは無駄なんだ、きつと。月のおさがりは、僕たちには姿を見せないことに決めてるみたいだ」

そのとき、たかが化石が見つからないくらいで大げさな、と思ったことは確かだ。しかし、少年の真摯な表情は、私が茶々を入れる隙を与えてはくれなかった。少し間をおいてから、私は言った。

「今回、化石が見つからなかったからと言って、何も得られなかったわけじゃないだろう？ 森のなかを歩き回って、ここの空気を吸って、何かしら得られたものがある。形にはなっていないなくても、何か自分にとつてプラスになったものが、必ずあるはずだ」

「例えば——仁科さんと会ったこと？」

「ま、それも一つかもね。プラスかどうかはわからないが」

私は苦笑した。

「でも、それって、大人の言い草だよ。形になつてない何かを獲得できた、なんて、普通は実感できないよ。何も手に入らなかったことを慰めるために、そう思い込もうとしてるんじゃない？ 大人は、それで納得できるんだ。でも、僕たちは、できない」

「厳しいんだね、旭君は」

少年はふと真顔になり、私の顔を見つめた。

「厳しいよ。三笠旭って奴は、すごく厳しいんだ。だから、月のおさがりにこだわって……全部なくすようなことをしちゃうんだ……」

彼の言葉の後半はつぶやきとなり、曖昧に夜気に拡散していった。

突然、彼は顔を上げた。

「ねえ、何か吹いてくれる？」

私は微笑してうなずいた。

ブルース・ハープを口にあてる。

曲は、「アメージング・グレース」。

透き通った音が、夜の空気に溶け込んだ。切なく、そして聖なる旋律が、うねり、高まり、静かだが力強く響き渡る。

演奏が、終わった。

少年が笑みを浮かべながら拍手をしてくれた。私はいささか照れくさくなり、おどけた仕草でお辞儀をして見せた。

「ブラボー！ とつても素敵だった。ありがとう」

「いや、お礼を言うのは僕のほうだよ。ありがとう。実は、褒められたのははじめてなんだ」

少年は立ち上がりながら、静かに言った。

「もう行かなくちゃ」

「もう化石は探さないの？」

「またいつか、ね」

そう言いながら、少年はもう歩き始めていた。彼の背中は、不相応に重く大きな何かを背負っているように見えた。そんな彼の背中に向かって、私はどんな言葉もかけることはできなかった。

山の濃密な夜のなかに、少年の姿は溶け込んで消えた。

砂を踏みしめる足音で目覚めた。

枕元に置いた腕時計を見た。八時少し過ぎ。いつもより一時間以上も寝坊だ。ここ数日、目を追って目覚める時刻が遅くなっている。シュラフから這い出そうとした瞬間、激しい頭痛が脳天を直撃した。昨夜のウイスキーがまだ血流内に残っている。うめいた。

耳を澄ますと、足音はテントに近づいていた。

——そこまで書いて、私は手を止めた。たったこれだけの文章を綴っただけで、手

首が痛い。万年筆を持ったまま、両手首をぐるぐると回してみる。

目覚めたときから高揚感があった。

そそくさと朝飯を済ませると、原稿用紙を開いた。今なら、書ける。そう思った。天候は、必ずしもよくはなかった。空を分厚い雲が覆い、気温は確実に昨日より三度は低かった。風も、強い。

私はテントの前の丸石に腰を下ろし、吹き飛ばされそうになる原稿用紙を手で押さえながら、この一週間の私の生を、書き綴り始めた。先の展開など、考えてはいなかった。私はこの龍之尾川の畔に天幕を張り、そこでものを食い、寝起きし、排泄し、呼吸し、歩き回った。その事実を原稿用紙に書き記すだけだ。

何か私の頭を覆っていた膜のようなものが、今になってはがれ落ちたような感覚があった。時期が来れば自然とそうなるものであったのか、それとも「月のおさがり」を追い求める少年と出会ったことで、私の「脱皮」が可能になったのか。

昨日採取した貝の遺骸を、もう一度眺める。眺めながら、一千万年以上前の、波の打ち寄せる広い海岸を思った。太古の波打ち際の風景を思った。

「ここだな」

太い男の声に、私の意識は一千五百万年の時空を一瞬に越えて、現実に戻された。

中年の男女が、川の下流側の砂地に立っていた。私のテントから二十メートルも離れていない。二人とも綿の長袖長ズボンを着け、小さなナップザックを背負っていた。二人とも、野外を歩き回ることに慣れているようには見えなかった。

中年の男は、龍之尾川の対岸の崖を見つめていた。片手に写真らしきものを持っていて。女のほうと、一瞬私の眼が合った。中年の女は、警戒感を隠した面もちで、私に会釈した。私も会釈を返した。男のほうは、ことさらに私の存在を無視しているようだった。

「もうちよつと向こうだ」

中年の男はやや怒ったような口調で言い、足早に私のテントのほうへ近づいてきた。それでもかたくなに、私を見ようとはせず、風化した砂岩の崖だけに顔を向けた。

私は二人に歩み寄った。二人の背中が、単に中年夫婦が山歩きにきただけとは思えない、暗い光を反射しているように見えた。フィールドには似つかわしくない沈鬱な空気が、彼らの周りにだけ漂っている。それは「死への道行き」といった不吉な言葉を私に思い起こさせた。

「何か、お探しですか？」

私が話しかけると、二人は素早くくくりと振り向いた。

「いえ、べつに」

男のほうが素っ気なく答え、また崖のほうに顔を向けた。

私はそんな態度に構わずに続けた。

「ここまで歩いてくるのは大変だったでしょう。ろくに道らしい道ありませんから」
答えはない。

「山菜やタケノコも、この辺りでは採れないんです。ただ、大昔の貝の化石だけは、
たくさん崖に埋まっていますけど」

そのときだった。二人は同時に体をびくつと震わせた。男のほうは恐ろしい形相で
私をにらみつけた。その横で、女のほうが小刻みに肩を震わせ始めた。

「君は……何を知っているんだ？」

震える声で男は言った。その両眼は、暗く哀しい怒りで揺れていた。私は狼狽し、
何も言葉を返すことができなかった。

「なんて、なんて馬鹿な子……」

女のほうは、ついにこらえきれずに嗚咽し、地面にしゃがみ込んで泣き始めた。

「泣くな、こんなところで泣いたって、あの子は喜ばん」

男は女の脇にしゃがみ込み、ぶっきらぼうに言った。

「だって……だってあの子は、化石に殺されたんですよ」

女は嗚咽の隙間に絞り出すようにして、言った。男はかぶりを振り、私を見上げた。

その眼から怒りは消えていたが、哀しみはより深まっているようだった。

男は言った。

「ここで、息子が死んだんだ」

「明日は、息子の高校の入学式なんだよ。明日から、あれも高校生になるはずだった。
それなのに、こんなところで命を落としてしまった……」

父親は私から受け取ったシエラカップの紅茶を、さも苦そうに飲み干した。砂糖も
UISキーも多めに入れたのだが。母親のほうは、カップこそ受け取ったものの、そ
れを両手で包み込むように持ったまま、口を付けようとしなかった。

「ここに、化石を採取しに来たのですね」

「そう。息子は、小学校の頃から化石が好きだったのだ。日曜になると、ハンマーを

ナップザックに入れて、あちこちに化石を探りに出かけた。そのたびに、我が家には貝殻だの葉っぱだのの化石の入った岩がそれこそ山のように持ち込まれて、あの子の部屋は、いつもほこりっぽくて、砂の匂いがしていた。私が思い出すのは、その砂の匂いなんだよ。この河原も、同じような匂いがする」

そこで不意に母親が顔を上げ、夫を見て言った。

「わたしは、その匂いが厭。あの子の部屋にある石を、みんな捨ててやりたい。あんな汚い石ころのせいで、あの子が死んだんです。石ころに、あの子は殺されたんです。そんなこと、理不尽過ぎます」

「馬鹿なことを言うんじゃない。あれはあれなりに、自分の好きな道を進んでいたんだ」

「その代償が、死ですか？ 自分の好きな化石を追い求めて命を落とし、それで旭が満足しているとしても言うんですか？」

衝撃が私を襲った。

口のなかが乾いていくのを自覚した。背筋を冷たい汗が流れていった。

「今、旭とおっしゃいましたか？」

息を殺して訊ねると、父親はうなずいた。

「息子の名だ」

「もしかして……三笠旭君ですか」

「そう。どうして知っているのです？」

私は唾を飲み込み、無理に喉を湿らせた。父親の問いには答えずに、私は問いを返した。

「旭君が探していた化石というのを、ご存じですか？」

「詳しくは知らない。が、月のどうかという名前だった。不思議な形をした宝石みたいな化石だと言っていた。その化石が、必ず龍之尾川の近くで見つかるはずだ、と意気盛んに家を出ていった。今年の正月が明けてすぐだった。それが、旭を見た最後だったんだ……」

あえいだ。息さえも苦しくなった。が、中年の夫婦はそんな私の様子に気づいた様子はなかった。口ごもる父親のあとを引き継ぐように、母親が言った。

「止めればよかったです。わたしは、そう言うつもりでした。まだ受験勉強も終わっていないっていうのに友達と化石採りだなんて、そんなことをやってる場合じゃないって、わたしは言いました。けれど、あの子は聞かなかった。笑って、『もしも高

校に落ちたらもう小遣いはいらぬから』なんて言つて、うちを出てつたんです。わたしは、止めるべきだつたんです。なのに、わたしはあの子のあまりの熱心に、出かけることを許してしまつた。わたしがあの子のとき止めさえすれば、あの子は、こんな人も通わぬところで馬鹿げた石ころのために死ななくてもよかつたんです……」

「馬鹿げた石ころ……確かに私たちにはそうと思へん。けれど、あの子にとつてはとても大事な、体を張つて追い求めるべき価値のあるものだつたんだ。そんな言い方をするもんぢやない」

母親のほうはただ黙つて首を左右に振るだけだつた。

狼狽を押し殺し、私は訊いた。

「旭君は、どこで亡くなつたのですか？」

「写真がある。警察が撮つたものをもらつたんだ。ちやうどこのテントの近くらしい」父親は私に一葉の写真を差し出した。確かに、龍之尾川の対岸の崖が映し出されている。ここで一週間もテント生活をしているのだ。すぐにどこなのか、わかつた。

「ちやうどあの辺りですね」

私はその場所を指さした。テントよりやや下流より、崖の上の松の木が大きく枝を垂れ下がらせているところだつた。

私たちは立ち上がり、その場所へ近づいてみた。

その途中で、私は思わず歩みを止めた。父親と母親が怪訝そうな顔で私を見ていることはわかつたが、私は立ち止まらずにいられなかつた。

なぜならその場所は、深夜に少年が川の中に立つて見上げていたところだつたから。見えた——白い塊。

貝殻ではなかつた。質感が違つている。太陽の光を反射し、滑らかなその表面が鈍く光つていた。

私は唾を飲み込んだ。

月のおさがり——

「旭は、この崖によじ上ろうとして、そして、落ちた……」

父親はかすれた声で言つた。その横に立つて母親は、何度も何度もかぶりを振つていた。この世のすべてを否定したがっているかのように。

私は両親の脇に立ち、無言のままその化石を見つめた。一千万年以上の時を経て、ちつぽけな人間の前に姿を現した月のおさがりを。

「あの子は、ここで、死んだ」

もう一度、父親は言った。

原稿を落とした。

結局私は「くしゃみしてもひとり」の原稿を板谷編集長に渡すことはできなかった。その号の「くしゃみ」は、私の撮った数枚の写真に、簡単なキャプションをつけただけの「番外編」となった。そのことについて、板谷編集長は深く私を問いつめることはなかった。

正確に言えば、原稿を書けなかったわけではない。実際に私は、規定枚数の原稿を一度書き上げていた。しかし、私はそれを「フィールド・スケープ」誌に発表できなかった。私の内部の何かがそれを阻んだ。

崖の風化した砂岩の中に埋もれた「月のおさがり」のことは、旭少年の両親には告げなかった。あのちつぽけな化石を探し求めた結果、旭君は亡くなったのです——そんなことを両親に言えるはずもなかった。

そう告げたときの両親の反応が、予測できなかった。息子の命の代償となった存在のあまりのつまらなさに衝撃を受けるか、息子の命を奪った憎い化石を叩き壊そうとするか、あるいは息子の形見としてその手のなかに優しく包み込もうとするか——

両親はしばらく息子の死の現場にたたずんだ末、何も言わずに街に去っていった。

両親が去ったあとも、私は月のおさがりの化石を掘り出さなかった。無理をすれば崖を這い上がることもできたらう。ハンマーはなくとも、ナイフで岩を削って砂岩の崖から化石を取り出すことも可能だったはずだ。が、旭少年が追い求め、結果として命を落とす原因となった化石を、この私が掘り出すことは許されないように思えた。私が龍之尾川で体験した出来事は、すべて私の胸の裡だけに秘められることになった。話したところで、誰も信じてはくれないだろう。べつにそれは構わなかった。これは、誰かと共有すべき思い出ではなく、私が独りで忘却という名の風化から守り続けるべき体験なのだった。

「フィールド・スケープ」の原稿を落としたが、板谷編集長は私を誡にはしなかった。その後程なくして私はべつのアウトドア雑誌の取材のため、ニュージールランドに一ヶ月ほど出かけることになった。帰国すると、日本はもう初夏になっていた。次の「くしゃみしてもひとり」の打ち合わせのために「フィールド・スケープ」編集部を訪れると、板谷編集長がにやにやしながら小さな箱を私に差し出した。

「ファンからのプレゼントみたい。原稿が書けなくても、見守ってくれてる読者はたくさんいるのよ」

「脅迫状か、郵便爆弾かもしれませんよ」

私は冗談めかして言ったが、半分以上は本気だった。宅配便で数週間前に編集部が付で送られてきた小箱——紅茶の缶程度。大ききのわりに軽かった。

差出人を見た。知らぬ名前——島村邦也。さっそく開封してみた。

箱を開けた私は、凍り付いた。

「どうしたの？ 爆弾でも入ってた？」

板谷編集長が怪訝そうにのぞき込んできた。実際、私の心のなかでは爆弾の爆発にも匹敵する衝撃が起こっていた。

箱のなかには脱脂綿が詰められていた。そして、雪に埋もれた彫刻のように、白い脱脂綿のあいだから、それが姿を見せていた。箱の一番底に、折り畳まれた紙片も入っていた。私はそれらをそつと取り出した。

まるで人間の手によつて磨かれたかのような精緻な螺旋の塔。高さ約五センチの円錐形の巻き貝の化石だった。下半分は壊れてなくなっているようだった。化石とはいっても、ただの石でできているのではない。深い深い乳白色——宝石のようだ。

「何なの、これ？」

板谷編集長は気味の悪いものでも見るように、眉根に皺を寄せた。

「月のおさがりですよ」

私は答えた。

前略。

まず最初に謝っておかなきゃいけません。嘘をついていて、ごめんなさい。仁科さんをだましたり、驚かせたりする気は全然なかったんです。

ぼくが龍之尾川から家に帰った次の日に仁科さんが旭の両親と会ったということ、旭のお母さんから聞きました。仁科さんがどれほどショックを受けただろう、とぼくは心配になりました。

その次の日曜日に、大急ぎでぼくは龍之尾川の、仁科さんがテントを張っていたところ、つまり旭が死んだところへもう一度行きました。けれど、もう仁科さんの姿はなくて、テントもありませんでした。

はじめてそのとき、ぼくは罪悪感を感じました。仁科さんに対して、旭に対して

も、旭の両親に対しても、ぼくはとんでもなくひどいことをやってしまったんじゃないか、と悩みました。それで、こんなかたちで手紙を書くことにしました。

ぼくは、三笠旭の親友でした。仁科さんにお話したように、旭はいじめられっ子で、ぼくしか話し相手はいませんでした。

でも、旭がぼくの親友だったかという点、そうとは言えません。

旭はぼくのことを親友と思ってくれていたけれど、ぼくはそれを迷惑に思っていたのが本音です。いじめられていた旭が、すがるような眼でぼくを見つめてくるのが嫌でした。それでもぼくが旭に対するいじめに加わらずに、旭をかばったりしたのは、そんな「ひきょうでない自分」を自分でかっこいいと思っていたからなのです。やっぱりぼくはとてもひきょうな男だったのです。

旭はぼくがそんなやつだとは知りませんでした。毎日毎日学校でいじめられていて、そのつらさをまぎらわすために化石探しに出かけていました。

そんな旭がずっとずっと心を奪われていたのが、月のおさがりです。月のおさがりは、ほんとうはヴィカリアという海水と淡水の中間のところに住む貝の化石です。巻き貝の中身がオパールに変化したあと、外側の貝殻が解けてなくなってしまう、オパールだけが残った化石が、月のおさがりです。

旭は、小学校で理科室に閉じ込められたとき以来、ずっと月のおさがりを夢に見ていたようです。

いつかきつとこの奇妙な化石を見つける、と何度もぼくに向かって宣言しました。旭の気持ちが変わり移ったのか、ぼくもすぐにそのヴィカリアの不思議な魅力に取りつかれました。オパールでできたらせん塔を、自分で見つけ出してみたいと思うようになりました。

旭は難しい専門書を読みあさった末、地層の時代と環境から考えて、龍之尾川の流域から月のおさがりが見つかるかもしれない、と推理したのです。まだ龍之尾川の周辺の地層からは、ヴィカリアの化石は見つかっていません。つまり、もしぼくと旭が見つけたら、それは新発見ということになります。

ぼくと旭は、冬休みに龍之尾川に月のおさがり探しに出かけました。ぼくの親戚の家が近くにあるので、そこに泊めてもらって、毎日朝早くから化石採りに向かいました。

二日目に、ぼくは崖に月のおさがりが埋まっているのを見つけました。

そして、旭が死んでしまいました。

もしかしたら、ぼくが三笠旭を殺してしまったのかもしれない。

あのときぼくが、崖の上に半分埋もれた月のおさがりを見つけさえしなければ、旭は死ななくてすみました。あのとき先に崖に上ろうとしたぼくが失敗せずに月のおさがりを掘り出していれば、旭は死ななくてすみました。あのとき崖から滑り落ちた旭をぼくがとつきに支えていれば、彼は死ななくてすみました。

そんな考えが、ずつとずつとぼくの頭のなかから消えようとしませんでした。

どうやったら、旭が死んだことをつぐなえるだろう、何をしたら旭は喜ぶだろう、とさんざん考えました。結局、ぼくにできるのは、あの月のおさがりをおの手で掘り出すことだけでした。それで、春休みになつてまた龍之尾川に行き、そこで仁科さんに会ったというわけです。

どうしてそのときに旭の名前を名乗ってしまったのか、自分でもわかりません。旭の代わりに月のおさがりを手に入れてやる、旭のやれなかったことをぼくがやってやる、とあまりに強く思っていたために、つい自分は三笠旭だ、と名乗ってしまったのです。

けれど、ぼくは月のおさがり掘り出すことができませんでした。ここで旭が死んだ。そう思うと足がすくんで、あの崖に上ることができなかったのです。

悔しい気持ちで一杯でした。親戚の家の布団に入っても眠れなくて、夜中に抜け出して旭の死んだ場所——月のおさがりが埋もれている場所へ行ってみました。行ったとたん、泣けてきてしょうがありませんでした。その場を仁科さんに見られてしまい、ぼくは恥ずかしくて、悔しくて、情けなくて、逃げ出してしまいました。

このあいだ、もう一度龍之尾川に行きました。岩をハンマーで削って足場を作り、よじ登りました。そして、あの歯の化石を掘り出すことができたのです。

「やった」と思ったとそのとき、ぼくは崖から滑り落ちました。泳ぐように手をばたばたとさせたら、さらに体が傾いて、頭から川のなかに落ちました。

確かに頭に衝撃がありました。一瞬、これで旭に会えるのかな、と思いました。

信じられないことに、ぼくは、無傷でした。その代わりに、ぼくの手のなかの月のおさがりが、二つに割れていました。まるで、ぼくの頭の身代わりになったかのように。

ぼくには、旭がこの化石を通じてぼくを守ってくれたように思えました。

うれしいと同時に、つらくもありました。ぼくは旭を死なせてしまったことをつぐなおうとヴィカリアの化石を掘り出したのに、逆に旭に助けられてしまったのですか

ら。

そんな月のおさがりの割れた半分を、仁科さんに持っていて欲しいと思います。きつと旭も、仁科さんみたいな人に大事に持っていてもらえば、喜ぶと思います。

このヴィカリアの化石は新発見なので、大学や博物館に持っていけば研究の材料になるかもしれません。でも、ぼくはこの化石をどこにも持っていくつもりはありません。これは、旭が命をかけてぼくに手渡してくれた贈り物です。仁科さんなら、ぼくのこの気持ちをわかってくれると思います。

仁科さんも雑誌のお仕事がんばってください。ぼくも、これから旭の代わりに化石探しをがんばり続けるつもりです。

それでは、さようなら。

島村邦也

追伸 仁科さんは、月のおさがりのことを、キレイな名前だと言っていましたね。「おさがり」っていうのは、実は「うんち」っていう意味なんです。